

## 唐話資料における句読法

### 冠山の唐話辞書を中心に

何 暁麗

#### 一. はじめに

句読点の符号、また使い分けの準則を示したのは、明治三十九年、文部大臣官房図書課に発表された『句読法案』<sup>一</sup>である。『句読法案』によって、句読点の使い方が定着した。『句読法案』が発表されるまでの、近世・近代の句読法については、杉本つとむや飛田良文などの一連の研究がある。

明治初年から『句読法案』までの和文における句読点の実態について、飛田(一九七四)では「……これらは、今日の句点。と読点、にあたる句読表示だけを基準にして分類したものである。このほか、私の気付かなかったものもあるであろうが、ともかく、一二種類もの型があった。そして、同じ型の中で、符号の使用度数の高いもの低いものがあり、その多様性は驚くばかりである」のように述べている。この記述から、当時の句読点の使用は統一されておらず、多種多様であることが窺われる。

明治初年から『句読法案』までに使われている句読点の形は飛田(一九七四)で述べている。ここでは、句読点の形だけではなく、句読点の

位置も含めて私に調べてみると、明治初年の句読点は次のようである。

文学作品

- 『三歳当世書生氣質』一(明治一八年)…………… $\langle \circ \rangle$ 文字列の右下  
よりやや出ているところ

- 『浮雲』第一篇・第二篇(明治二〇年・二二年)…………… $\langle \circ \rangle$   
文字の右下

- 『武蔵野』(明治三四年)…………… $\langle \circ \rangle$ 文字の右下

- 『我輩は猫である』上・中・下(明治三八年・三九年・四〇年)

…………… $\langle \circ \rangle$ 文字の右下

学校教育

- 『小学用語格』(明治一四年)…………… $\langle \circ \rangle$ 文字の右下

- 『漢字要覧』(明治四一年)…………… $\langle \circ \rangle$ 文字の右下

右のように、明治初年の文学作品、学校教育分野では句読点の形には $\langle \circ \rangle$ と $\langle \circ \rangle$ がある。杉本(一九六六b)では $\langle \circ \rangle$ と $\langle \circ \rangle$ も挙げている。

句読点の使い分けに関して、へ、く、の一種類を使う作品もあれば、へ、く、とへ、く、の二種類を使うものもある。例えば『浮雲』第一篇・第二篇のようにへ、く、とへ、く、の両方が見られるが、飛田(一九七四)は「必要に応じて使用しており、意識的に使い分けてはいないようである」と述べている。つまり、句読点の形、また句点と読点の使い分けは『句読法案』で基準が示されるまで、まだ固定していなかったと考えられている。

句読点の位置については、『三編当世書生気質』一のように句読点を文字列の右下よりやや出るところに施す作品も見られる。これは杉本(一九六六b)が述べたように「書生気質(の句読点や記号の用法…:括弧内は筆者による)は江戸時代とほとんどかわらない」点にあると思われる。句読点の位置は多少の揺れが見られるが、明治初年においては、ほぼ文字の右下に固定していると考えられる。

要するに、当時の句読点の位置はほぼ定着していたので、『句読法案』では、これについて特に準則を定めていないのだろう。また、明治時代を中心にした句読法の研究では、句読点の位置について言及していないことも施す位置が定着していたためであろう。

次に、江戸時代の資料を確認してみる。

江戸時代の文学作品を中心に、句読法の史的考察を行う先行研究に、杉本(一九六六a)が挙げられる。杉本(一九六六a)では、江戸前期から明治初期にかけて、具体的な文学作品に現れている句読法によって、その使用の実態を検討した。また、西欧的な句読法に注

意を寄せ、それを紹介した蘭学者と句読法についても述べている。

江戸時代の和文資料における句読点の状況について、代表として、(a)御伽草子、(b)仮名草子、(c)西鶴の作品、(d)浮世草子、(e)洒落本から次の作品を選んで確認してみる(\*傍線は筆者による)。

- (a) 御伽草子(江戸初期～江戸中期)
- 『文王さうし』……………へ、く、文字の右下
- 『鉢かづき』……………へ、く、文字の右下
- 『横笛草子』……………へ、く、文字の右下
- 『酒呑童子』……………へ、く、文字の右下
- (b) 仮名草子
- 『田夫物語』(寛永頃)……………へ、く、文字の中央下
- 『角田川物かたり』(明暦二年)……………へ、く、文字の右下
- 『祇園物語』(寛永末)……………へ、く、文字の右下
- 『石山寺入相鐘』(延宝四年)……………へ、く、文字の右下
- (c) 西鶴の作品
- 『武道伝来記』(貞享四年)……………へ、く、文字の右下
- 『日本永代蔵』(貞享五年)……………へ、く、文字の右下
- 『好色一代男』(天和二年)……………へ、く、文字の右下・中央下
- (d) 浮世草子
- 『傾城国土産』(宝永元年)……………へ、く、文字の右下
- 『御入部伽羅女』(宝永七年)……………へ、く、文字の右下・中央下

○『新小夜風』(正徳五年)……………(へ・)文字の右下

○『新色五卷書』(元禄一一年)……………(へ・)文字の右下

(e) 洒落本

○『史林残花』(享保一五年)……………(へ・)文字の右下

○『北里懲愆録』(明和戊子五)……………(へ・)文字の右下

○『瓢軽雑病論』(明和・安永期)……………(へ・)文字の右下

○『和唐珍解』(天明五年)……………(へ・)文字の中央下

以上の和文資料を確認してきたように、句読点の形に、(へ・)と(へ・)がある。このほか、杉本(一九六六a)では(へ・)も挙げている。句読点の形について、(へ・)と(へ・)のどちらか一方だけを使う場合もあれば、両方を使う場合もある。但し、両方を使う場合でも、左に挙げる用例のように、句点と読点の使い分けが見られない。

○  
くうんまをてねわつく  
いんめいひてまなごうてねん  
まのまをてゆのまをまうたひて  
いんめいひてまなごうてねん  
まのまをてゆのまをまうたひて  
いんめいひてまなごうてねん

(中略)

らひてあはれでいんめいひて  
まのまをてゆのまをまうたひて  
いんめいひてまなごうてねん  
まのまをてゆのまをまうたひて  
いんめいひてまなごうてねん

(『新色五卷書』四之卷・十五ウ十六オ)

句読点の施す位置について、文字の中央下に施すものもあるが、文字の右下に施すものが多く見られる。

西鶴の作品『好色一代男』、浮世草子の『御入部伽羅女』では文字の右下と中央下の両方が見られるが、次に挙げる用例のように、一方が句点で一方は読点という使い分けではない。

○  
やうそまはもはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる

(『好色一代男』卷四・五ウ)

○  
らみりえの餅をあく  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはる

(『好色一代男』卷六・十二オ)

以上、句読法について先行研究をおさえてみた。その結果、(1)句読点の位置、(2)句読点の形、(3)句点と読点の使い分けという問題があり、それら(1)(2)(3)がどのように固定していったかという問題があることが分かった。

これらの問題について和文資料を自分なりに調査してみた。その結果、既に江戸時代に和文では句読点が右下に施される傾向があることが分かった。従来、句読法には欧米の影響が主に指摘されてきたが、このような傾向があるとすれば、素地として明治時代以前における句読法の状況を明らかにする必要があるように思う。句読点の位置や形

などは江戸期に固定化している傾向もあるからである。

そこで、本稿では句読点の位置、句読点の形、句点と読点の使い分けについて具体的に文献資料から考察してみる。

本稿は次の理由で岡島冠山<sup>二</sup>の唐話辞書を中心に考察を進めたい。

江戸時代、外国語として日本に受容された唐話は、それより先に渡来した漢文より外来文化的である。一方で、また唐音は日本漢字音の一つとして流行した時期もある。このような位置にある唐話における句読法が漢文の句読法や和文の句読法とどのような関係にあるかを考察する必要があるとそうだと考えられるからである。

## 二、漢文資料における句読点

江戸時代の和文資料では、句点と読点の使い分けは見えないが、管見では江戸初期無刊記本の『遊仙窟』では、句読点の施す位置によって句点と読点を使い分けていると思われるので、報告したい。『遊仙窟』では句読点はへ。の一種類を使っているが、施す位置によって、句点と読点を使い分けている。次に示したように、文字の中央下に施されているのは読点で、文字の右下に施されているのは句点であると思われる。

○『遊仙窟』（江戸初期無刊記本）

若夫積石山者<sup>一</sup>。山海經曰。積石。在金城<sup>二</sup>。郡河關縣西南。羌中河<sup>三</sup>。

水行<sup>一</sup>塞<sup>二</sup>外<sup>三</sup>。東<sup>四</sup>北<sup>五</sup>入<sup>六</sup>。塞<sup>七</sup>内<sup>八</sup>。一說云。在<sup>九</sup>繼州<sup>十</sup>。北龍門縣。從<sup>一</sup>黃河<sup>二</sup>上<sup>三</sup>。去<sup>四</sup>洛<sup>五</sup>四百餘里<sup>六</sup>。

漢文における句点と読点を使い分ける句読法を紹介する書に太宰春台の『和読要領』<sup>三</sup>が挙げられる。「点書法」に次のように記されている。

○句読ヲ点ズルコトハ、其法一様ナラズ、或ハ圈ヲ用ヒ或ハ批ヲ用フ、圈トハ、○ナリ、批トハ、ナリ、秘書省ノ校書ノ式ニハ、句八字ノ旁ニ点ジ、読八字ノ中間ニ点ズトイヘリ、中華ノ書ノ中ニ、此式ヲ用テ句読ヲ点ジタル本アリ、其時ハ小圈ヲ用フ、又句ニハ圈ヲ用ヒ、読ニハ批ヲ用ルコトアリ、其時ハ句モ読モ皆旁ニ点ズ、又句ト読トヲ別タズ、皆圈ヲ用ヒ、皆批ヲ用ルコトアリ、其時モ句読俱ニ旁ニ点ズ、カクノ如ク種種ノ点式アリ、人人ノ意ニテ、時ニ臨テ何レノ式ヲモ用ルナリ、中華ヨリ来レル書ヲ多ク見テ、其異ヲ考フベシ（\*全ルビ省略、傍線は筆者）（卷下ニオトニウ）  
飛田（一九七四）では、これらを（a）小圈を用いて句は字の傍に、読は字の中間に点ずる方法、（b）句には圈を、読には批を用いる方法、（c）皆。を用いる方法、（d）皆、を用いる方法の四種類にまとめている。

『遊仙窟』の句読法は（a）に一致している。飛田（一九八六）では和文において「こうした使い分けの試みは明治時代に入るまで、行われなかったようである」と述べるが、漢文の世界では句点と読点の区別が行われている場合があったとみてよいだろう。

三. 冠山の唐話辞書

冠山の『唐話纂要』、『唐音雅俗語類』、『唐訳便覧』、『唐話使用』を考察対象とする。この四冊の内容は次表で示したように多彩である。辞書と言っても、唐話の単語だけではなく、「長短話」や「説話」また『唐話纂要』巻六のような小説なども集められている。句読点がこれらの文に多用されているので、この分野の句読点を考察する好資料になると思われる。

なお、刊本は必ず著者自身の句読点を施すとは言えないが、まず刊本を対象にし、自筆本については別の機会に譲りたい。

『唐話纂要』 享保三年（一七一八） 卷一：二字話・三字話 卷二：四字話 卷三：五字話・六字話・常言 卷四：長短話（対話形式） 卷五：親族・器用・畜獸・蟲介・禽鳥・龍魚・米穀・菜蔬・果蔬・樹竹・花柳・船具・数目・小曲（青山・崔鶯・張君・桃花・一愛・一更・二更・三更・四更・五更）・疋頭 卷六：「和漢奇談」（孫八救人得福・徳容行善有報）
『唐音雅俗語類』 享保一一年（一七二六） 卷一：雅語類（上段二字話、中段と下段四字話） 卷二：長短雅語類（四字話、五字話～） 卷三：俗語類（上段四字話、下段八字話） 卷四：俗語類（問答式の会話長文・律令の問答） 卷五：俗語類（問答式の会話長文、全部律令に関する問答）
『唐訳便覧』 享保一一年（一七二六） 卷一：イロハ順のイ～ヌ 卷二：イロハ順のル～ラ 卷三：イロハ順のム～キ 卷四：イロハ順のユ～スと長短雑語） 卷五：長短雑語
『唐話使用』 享保二〇年（一七三五） 卷一：二字并四字等話 卷二：三字并五字等話 卷三：六字話并七字話 卷四：初相見説話・平日相會説話・諸般謝人説話・望人見願説話・諸般借貸説話・ 卷五：諸般質人説話・諸般諫勸人説話・諸般讚嘆人説話 卷六：興僧家相會説話・長短雑話・用器

唐話資料における句読法——冠山の唐話辞書を中心に——何 曉麗

四. 唐話における句点と読点

冠山の唐話における句読点の位置は、唐話文字の右下に施す場合もあれば、文字の中央下に施す場合もある。

ここで、冠山の唐話辞書から用例を挙げて、句点と読点の使い分けがあるかどうかを確認してみる（\*用例につける「ㄱ」は筆者による。また、例文の後ろに付した略記、例えば『唐音雅俗語類』巻四・一オ）は『唐話辞書類集』に収録された『唐音雅俗語類』の巻四の一丁表にある用例であることを示す。

(1) 次聞高名朝分祈慕今日何幸不期拜願從今以後君蒙聖賞謝不韋

（『唐音雅俗語類』巻四・一オ）

(2) ○如今回客都在半路上天黑了又沒個伴  
富展從如何便得今夜在個裏宿歇明日早  
回客都不穩便

（『唐訳便覧』巻一・四オ～四ウ）

(1) の和文訳は「久シク御名ヲ承リ及ヒ。朝慕シタヒ奉リ候フ所ニ。今日ハ幸イ。期セズメ御目ニカ、リ候フ。向後御目ヲカケクダサレ候ハ。忝ナルヘク候。」である。

「久聞高名」の「名」の中央下にへ、「朝夕祈慕」の「慕」の右

下にへ。が施されている。これだけを見ると、「和読要領」の「句八字の旁二点ジ・読八字ノ中間二点ズ」の句読法と対応しているようである。しかし、次に来る文では、「今日何幸」の「幸」の右下にへ。、「不期拝顔」の「顔」の中央下にへ。が施されている。前句の「久聞高名」「朝夕忻慕」に施された句読点の使い分けと逆になっている。しかも、この唐話文章の終わりに「感謝不尽」の「尽」の中央下にへ。が施されている。

(2) の和文訳は「今カラカエリ候ハ。半途ニテ日クレ申ン。供人モ従ハザルヲナレハ。イカ、ニ存候フ。今夜ハコ、モトニ。トマリ候テ。明日早々カエリ候ハ。然ルエカラシヤ」である。

(1) と同じように、句読点の施す位置によって、句点と読点の使い分けが見られない。また、(2) の唐話文章の終わりに句読点は施されていない。

(1) と (2) を見てきたように、冠山の唐話辞書では句読点は文字の右下と文字の中央下の両方に施されているが、これによって、句点と読点を使い分けているわけではない。つまり、冠山の唐話辞書では句点と読点を使い分けていないと考えられる。

### 五. 唐話辞書中の和文における句読点

唐話に現れている句読点を検討する前に、唐話辞書の和文に現れている句読点を見てみよう。

(3) ヲキ農人ハ水損日損アリト云ヘ斥不耕ト云フナシ。  
(後略) (『唐話纂要』卷三・十六ウ)

(4) 昔在長崎ニ孫ハト云フ者アリ。替力人ニ過キテ。  
(後略) (『唐話纂要』卷六・九オ)

(5) ツコモトノ御名ハ遠近ニラダキコヘ候テモトヨリ  
仰キ望ミ候ヘ斥御近付ニカリナルヘ。ヘモラナク候テ。  
(後略) (『唐音雅俗語類』卷四・一オ)

(6) イツレモサハ早クナイテナサレテ。  
オチをサレクゴザ候ハン御免レク  
(『唐訳便覧』卷一・三ウ)

(7) 老夫ハオ識セバクアサシ。何ンゾ云ニ足ンマ。御自  
分ニハ。文ヲヨクシ。詩ヲヨクク。当地ノ第一人ト承リ。カ  
(後略) (『唐語使用』卷四・二オ)

(3) は「ヨキ農人ハ」の「ハ」、「水損日損アリト云ヘ斥」の「斥」、そして「不耕ト云フナシ」の「シ」の右下に圈点が施されている。以下これをへ。で示す。(4) ー(7) も(3) と同じようにへ。を施している。また、へ。の施す位置は(3) ー(7) で示したように、仮名の右下である。このように、冠山の唐話辞書における和文において、使われている記号も施す位置も固定していると言える。

## 六、唐話辞書中の白文における句読点

次に、唐話辞書の序跋の漢文に現れている句読点を見てみよう。

(8) 『唐訳便覧』の序文

古者辭無雅俗之別。國風諸篇出於  
里巷歌謠。其互平易近情。而後世尚  
(後略)

『唐訳便覧』の序文は(8)のように、圈点が文字の右横に施されている。以下これをへ○で示す。

また、『唐話纂要』の序文では、(9)のようにへ○が文字の右下に施されている。『唐話纂要』のもう一編の漢序と二編の跋(漢文)にも(9)と同じようにへ○が文字の右下に施されている。

(9) 『唐話纂要』の序文

唐話爲要。不止曉常言。以通兩情。其讀書作文。固  
有大關係。猶之膏於雜難。燕於夏。苟不通之。則涉  
(後略)

このように、冠山の唐話辞書の漢文では句読点の形はへ○とへ○の二種類がある。句読点の施す位置は文字の右にあるが、右横と右下

唐話資料における句読法——冠山の唐話辞書を中心に——何 曉麗

の両方が見られる。

ただし、(8)のような漢文の右横に施すへ○は、唐話本文には見られない。冠山以外の唐話辞書を調べてみると、漢文の序・凡例・小引では、へ○を文字の右横に施す唐話辞書には次の二冊が挙げられる。

○ 『語録訳義』(写本) 延享元年の凡例・同五年の序 へ○

○ 『雜纂訳解』(刊本) 宝暦十二年の小引 へ○

このほか、へ○ではなく、へ●、へ、を漢文の序・凡例の右横に施す唐話辞書は次のものがある。

○ 『忠義水滸伝解』(刊本) 宝暦七年の序・凡例 へ●

○ 『忠義水滸伝解』(刊本) 宝暦七年の自序 へ、

しかし、唐話本文において、冠山以外の唐話辞書も冠山の唐話辞書と同じく、句読点を文字の右横に施すことは見当たらない。

更に、漢序に施しているへ○とへ○を比較してみると、へ○が施されている(8)は訓点を付けていない白文である。これに対して、へ○が施されている(9)の漢文では訓点を付けている。冠山以外の唐話辞書においても、句読点が文字の右横に施されているのは、(8)と同じように訓点を付けていない白文である。

要するに、冠山の唐話辞書において、へ○を文字の右横に施すのは、白文専用の施し方だと考えられるだろう。

七. 句読点の形と四声点

唐話に現れる句読点の形を見てみよう。それと同時に句読点に使われる符号と四声点に使われる符号との関係についても検討してみる。

(10) 平常不作<sup>ヘ</sup>慙<sup>・</sup>心<sup>・</sup>事<sup>・</sup>半<sup>・</sup>夜<sup>・</sup>鼓<sup>・</sup>門<sup>・</sup>不<sup>・</sup>啓<sup>・</sup>驚<sup>・</sup>

『唐話纂要』(卷三・十一オ)

(11) 俗<sup>・</sup>在<sup>・</sup>長<sup>・</sup>崎<sup>・</sup>有<sup>・</sup>孫<sup>・</sup>八<sup>・</sup>者<sup>・</sup>齊<sup>・</sup>力<sup>・</sup>過<sup>・</sup>入<sup>・</sup>遊<sup>・</sup>俠<sup>・</sup>自<sup>・</sup>得<sup>・</sup>後<sup>・</sup>有<sup>・</sup>事<sup>・</sup>  
故<sup>・</sup>而<sup>・</sup>被<sup>・</sup>官<sup>・</sup>逐<sup>・</sup>放<sup>・</sup>遂<sup>・</sup>爲<sup>・</sup>干<sup>・</sup>隔<sup>・</sup>滌<sup>・</sup>漢<sup>・</sup>而<sup>・</sup>流<sup>・</sup>落<sup>・</sup>京<sup>・</sup>師<sup>・</sup>

『唐話纂要』(卷六・一オ)

(12) ○今<sup>・</sup>朝<sup>・</sup>仁<sup>・</sup>兄<sup>・</sup>尊<sup>・</sup>隆<sup>・</sup>今<sup>・</sup>節<sup>・</sup>愿<sup>・</sup>蒙<sup>・</sup>寵<sup>・</sup>招<sup>・</sup>耶<sup>・</sup>來<sup>・</sup>奉<sup>・</sup>賀<sup>・</sup>衆<sup>・</sup>  
然<sup>・</sup>添<sup>・</sup>壽<sup>・</sup>無<sup>・</sup>窮<sup>・</sup>恭<sup>・</sup>喜<sup>・</sup>恭<sup>・</sup>喜<sup>・</sup>

『唐話纂要』(卷五・一オ)

(10) (12) に挙げた例を見て分かるように、冠山の唐話に現れている句読点はへ・か・の(用例10・12)かへ・の(用例11)かである。

『唐話纂要』の卷三から卷五まで、また『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『唐話使用』には例外も僅かに見られるが、へ・のが句読点として使われている。『唐話纂要』の卷六はへ・のを句読点としている。つまり、冠山の唐話では、句読点はへ・か・ののどちらか一種類を使う「一点

方式」<sup>五</sup>である。

冠山の唐話の句読点は「一点方式」であるが、へ・のもへ・のも、句読点として現れている。但し、へ・のは『唐話纂要』の卷六だけに使われている句読点である。冠山の唐話において、句読点をへ・のにするか、それともへ・のにするかということは、唐話に施した四声点に深く関わっているように思われる。

冠山の唐話に四声点が初めて現れたのは『唐話纂要』卷六である。それ以前の享保元年(一七一六)の『唐話纂要』卷一から卷五には四声点が見られない<sup>六</sup>。このことから、冠山の唐話辞書に初めて四声点を施したのは卷六を加えて重刊した享保三年(一七一八)からだと考えられる。

享保三年(一七一八)に重刊した際、加えられた卷六の「和漢奇談」で四声点をへ・の、句読点をへ・のにしている(用例11を参照)。それ以前には、四声点は施されていないが、句読点としてへ・のを使っていることは既に述べた。しかし、卷六ではそれまで句読点であったへ・のを四声点として使い、句読点をへ・のにしたのである。

ただし、句読点をへ・の、四声点をへ・のにしたのは『唐話纂要』卷六だけである。それ以後に編纂された『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『唐話使用』において、四声点はへ・の<sup>七</sup>で現されている。句読点としてのへ・のも僅か見られるが、へ・の<sup>八</sup>で現している。

冠山の唐話に使う句読点と四声点の符号を次のように示すことができる。

- 『唐話纂要』卷一―卷五(享保元年) 句読点へ。 四声点なし
- 『唐話纂要』卷六(享保三年) 句読点へ。 四声点へ。 四声点へ。
- 『唐音雅俗語類』(享保一年) 句読点へ。 四声点へ。 四声点へ。
- 『唐訳便覧』(享保一年) 句読点へ。 四声点へ。 四声点へ。
- 『唐話使用』(享保二〇年) 句読点へ。 四声点へ。 四声点へ。

冠山の唐話において、句読点の符号にはへ。とへ。の両方が見られるが、『唐話纂要』巻六のようにへ。を句読点としたのは、恐らくへ。を四声点にしたからだと思われる。つまり、句読点に使う符号と四声点に使う符号との衝突を解消するためだと考えられる。また冠山の唐話における句読点の形に関する試みも窺われるだろう。この意味では享保三年は句読点の使用における一つ重要な試みの時期だとも考えられるだろう。

### 八. 唐話における句読点の位置

次に唐話に施されている句読点の位置を考察してみる。具体的な用例を見ながら、冠山の唐話における句読点の位置変化を検討していく。次の(13)―(15)は『唐話纂要』からの用例である。

- (13) **平常不作憂心事半夜敲門不驚驚**  
(卷三・十一才) (用例10の再掲)

- (14) 明日約酒三朋交同本游於你倘有貴暇二發同定  
要手君回我想好在家抱膝而坐哩

(卷四・十二ウー十三才)

- (15) 小弟這兩日爲沒要緊事奔走沒半刻在家安坐前  
幾次空落先生費盡再過兩天必有些閑空敢特設  
村酒奉扱少叙閑話便了

(卷四・五才)

(13) のように文字の右下に施される例が見える。また、(14) のように文字の中央下に施す例も見られる。更に、(15) のような例もある。(15) では「日」の次に来るへ。は文字の右下、「走」「坐」「天」「空」「扱」「了」の次にくるへ。は文字の中央下、「歩」の次にくるへ。は左下に施されている。

『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『唐話使用』における句読点の施す位置について、次の(16)―(21) のような例が挙げられる。

- (16) 次聞高金朝夕祈慕今日何幸不期差顏從今  
以後君蒙衆青嵐謝不盡

(『唐音雅俗語類』卷四・一才) (用例1の再掲)

(17) △小弟昨日將要到貴府被上司官隊本幹了一  
日公事又不及使使離離復罪非輕下請怒請怒

〔唐音雅俗語類〕卷四・五ウ

(16) と (17) は『唐音雅俗語類』の例である。(16) では句読点のへ。が文字の中央下と右下の両方に見られるが、(17) では、文字の右下に施されている。

(18) ○如今回谷都在半路上天黑又沒個伴  
富展從如何便得今夜在個裏宿歇明日早  
回本都不是穩便

〔唐訊便覽〕卷一・四オ～四ウ (用例2の再掲)

(19) ○那日所報的事情不知意  
思好不在緣何久無動靜千萬辨悉則個

〔唐訊便覽〕卷一・四ウ

(18) と (19) は『唐訊便覽』で連続して挙げられた二句であるが、(18) ではへ。は殆ど文字の中央下に施されている。これに対して、(19) ではへ。は文字の右下に施されている。

(20) ○先生不名如雷轟其欣暴日以久何幸在此拜  
識在蒙不鄙拜願須清請勿推放

〔唐話使用〕卷四・一ウ

(21) ○賢弟少會我常記挂你你豈不來問我一聲  
我實多多怪你

〔唐話使用〕卷四・七ウ

(20) と (21) は『唐話使用』からの用例である。(20) の句読点は文字の中央下と右下に施されている。(21) ではへ。は文字の右下に施されている。

(13) は『唐話纂要』卷三の十一オにある用例、(14) と (15) はそれぞれ同辞書の卷四の十二ウ～十三オと五オの例である。(16) (21) を含め、これらの用例は各辞書の句読点が初めて現れてくるところにある例である。

要するに、冠山の唐話における句読点の施す位置は、文字の中央下と文字の右下・左下の三つが見られる。但し、文字の左下に施された例は僅かである。冠山の唐話の全体から見ると、句読点の位置は文字の中央下か文字の右下かであると言える。

更に、文字の中央下に施す例と文字の右下に施す例を見てみると、これらの例は各辞書の句読点が初めて現れてくるところに多くあることが窺われる。

九. 『唐話纂要』 卷五 「小曲」 における句読点

『唐話纂要』 卷五に「小曲」を十曲挙げている。次に挙げる(22)と(23)のように、唐話に返り点と送り仮名などが振られていないが、(22)では、(◦)が文字の中央下と右下の両方に見られるが、(23)では、文字の右下に施されている。

(22) 青山在 綠水在 我 那 情 人 的 不 在 風 常 來 雨 常 來 我

那 音 信 的 不 來 春 公 愁 不 公 花 開 悶 不 得 開 珠 淚 兒

滴 汪 洋 了 冤 家 族 滿 得 東 洋 海

(『唐話纂要』 卷五・二四ウ)

(23)

桃 花 紅 李 花 白 春 光 得 明 媚 玉 蘭 花 紫 荆 花 杏 奪 得

春 巨 牡 丹 花 芍 藥 花 香 同 的 蘭 蕙 西 府 飛 紅 雨 滿 架

的 綻 着 嫩 瓊 象 的 那 花 開 了 花 開 堂 神 兒 合 金 嘴

(『唐話纂要』 卷五・二五ウ)

ただし、(22)のような(◦)を文字の右下と中央下の両方に施すのは、十曲の最初の二曲だけである。あとの八曲は(23)のように句読点が文字の右下に施されている。

一〇. 「周囲の環境」 について

句読点を文字の中央下に施すか、それとも文字の右下・左下に施すかは、文字の形およびその「周囲の環境」によるところがあると思われる。「周囲の環境」というのは、本稿では唐話に振られた返り点、送り仮名、中国語音を示すカタカナ、四声点などを含め、唐話文字の周囲に介在している文字や符号及びこれら以外の余白部分をさす。

唐話に現れている句読点は文字と文字の間に挟まれるか、文字と文字の横に施されているかのように、一字分をとっていない。つまり、文字と文字の間に空いているスペースを使用して施したのである。

次は具体的な用例を見ながら、検討してみよう。

(24)

長 兄 你 這 幾 日 有 什 麼 緊 要 事 整 日 出 門 我 曾 屢 屢 到 貴 府 問 候 無 一 次 在 家 相 見 你 興 頭 直 德 怒 怛 可 羨 可 羨

(『唐話纂要』 卷四・四ウ)

(24) で示したように、上文字と下文字の間のスペースによって、句読点の施す位置が変わってくるのが窺える。「日」「門」は文字の中央下、「事」「見」は文字の右下に施されている。「候」「頭」「忙」も文字と文字のスペースにあわせて施されたと言える。

(25)

如今天下 武丞皆能動護若伏事主公有餘力則不  
僧恣的便 在空地裡現出來或走馬射子或刺鎗使  
棒道恣演 習武藝而打熬氣力此前年大不相同

〔唐話纂要〕卷四・二ウ

また、(25)のように「力」が二ヶ所にあるが、一行目にある「力」の次にくるへ。へは右下に、三行目のは文字の中央下にへ。へが施されている。これは、一行目の「力」には右に空いているスペースがあるのに対して、三行目の「力」には右に送り仮名「ヲ」が施されており、「周囲の環境」に関わっていると思われる。

要するに、冠山の各辞書において、句読点が初めて現れてくるところに、文字の右下・左下と中央下に施されているが、これは唐話文字の形及びその「周囲の環境」に左右されたところがあると考えられる。

一一・各辞書の後半における句読点

ただし、次に挙げる(26)～(30)のような例も見られる。これらの例は(13)～(21)と同じような文字の形及びその「周囲の環境」に置かれているが、(13)～(21)と異なつて、句読点が全部文字の右下に施されている。

(26)

吾聞謀及及大通但共謀者不分首從皆凌遲  
處死及家屬盡行緣坐不識有諸

〔後略〕〔唐音雅俗語類〕卷五・一オ

(27)

△律曰凡泛海客商船到  
岸即將貨物盡實報官抽分若停場沿港土商

〔後略〕〔唐音雅俗語類〕卷五・二二ウ～二三オ

(28)

○婦女原來嬌嫩豈可用力  
打靴若有不是磨好馬一罵便了

〔唐訳便覧〕卷四・十八ウ

(29)

○常言道要知山下路須問過來人因此  
自家不曉得事只管問人便了

〔唐訳便覧〕卷五・十四オ

(30)

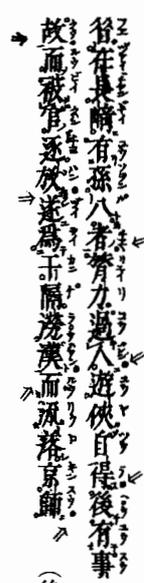
○你「迷地求名求功作事太性急所以又有  
破綻惹入朕話豈不足可恨果然古人說得好  
君子務其益以功損非以求名且以遠辱於池  
必演學古人的姿見小然未免有羞辱

〔唐話使用〕卷五・十ウ

(26) ー (30) に挙げた用例は各辞書の後半にある例であることを踏まえて、冠山の唐話における句読点は巻が後ろに推移するにつれて、文字の右下に施す傾向が顕著になってきたと言えるだろう。

### 一三二 『唐話纂要』 卷六 「和漢奇談」 における句読点

更に、(31) のような例もある。(31) では、へ・んが中国語音を示すカタカナの列に施されている。つまり、唐話を区切っている句読点と違って、カタカナを区切っていると考えられる。句読点をカタカナ列に施すと、文字の形や「周囲の環境」に依存するところが薄くなると思われる。(31) のように、句読点をカタカナ列に施したのは『唐話纂要』 卷六 「和漢奇談」 のみである。

(31) 

(『唐話纂要』 卷六・一オ) (用例11の再掲)

### 一三三 結論

以上、唐話辞書を中心に江戸時代の句読法について考察してきた。冠山の唐話辞書には和文、漢文、また唐話の三つの文体がある。この

三つの文体に施されている句読点はそれぞれ異なる諸相を呈している。和文には、へ・んが文字の右下に施されている。漢文には、へ○とへ・んがそれぞれ文字の右下と右横に施されている。唐話にはへ・んとへ・んが文字の右下と中央下に施されている。

言い換えれば、和文では一種類の符号が一つの場所に施されている。漢文では二種類の符号が二つの場所に施されているが、へ・んが文字の右下に、へ○が文字の右横にそれぞれ決まったところに使われている。しかも、へ○は白文専用の符号である。唐話では、へ・んとへ・んの二種類の符号が使われているが、へ・んは『唐話纂要』 卷六 「和漢奇談」 だけに使われ、しかも、中国語音を示すカタカナの列に施されている。へ・んはそれ以外のところに使われている。「周囲の環境」に依存しない『唐話纂要』 卷五 「小曲」 ではへ・んが文字の右下に、他の場合は文字の右下にも、中央下にも施されているが、各辞書の後半になると、文字の右下に施す傾向が顕著になってきた。

へ○を使う白文では、句読点が文字の右横に、へ・んを使う『唐話纂要』 卷六 「和漢奇談」 では、句読点がカタカナ列に施されている。それ以外の場合は、句読点の形はへ・んである。施す位置は各唐話辞書の前半において、文字の右下と中央下の両方に見られるが、ほかは文字の右下に施されている。

ここからは、句読点からみた外来文化の和化度が窺われるのではないかと思う。つまり、和化度が高いほど和文に近い句読法が使われ、和化度が低いほどへ・んとへ○といった句読点の形が用いられやすい

という傾向がある。表でまとめてみると、次のようになる。

文体	例文(*1)	句読点の位置	句読点の形	和化度
和文	(3) ー (7)	右下	。	←低 高→
訓点のある漢文	(9)	右下	。	
「周囲の環境」に依存しない唐話(*2)	(23)	右下	。	
「周囲の環境」に依存しない唐話(*3)	(26) ー (30)	右下	。	
「周囲の環境」に依存する唐話(*4)	(13) ー (21) ・ 他	中央下・右下	。	
四声点のある唐話	(26) ー (31) ・ 他	中央下・右下	。か・	
「周囲の環境」に依存しない唐話(*5)	(11) (31)	行外(カタカナ列)	・	
白文の漢文	(8)	行外(右横)	○	

\*1 本稿における通し番号 \*2 『唐話纂要』 卷五小曲 \*3 各唐話辞書の後半  
\*4 各唐話辞書の前半 \*5 『唐話纂要』 卷六「和漢奇談」

これによつて、各文体内部における位相差が窺うことができる。

句読点が後半では文字の右下に統一されてきたのは恐らく和文の影響ではないかと考えられる。唐話は外来語として受容され、句読点も様々な工夫がなされたのではないかと考えられる。外来文化を受け入れる際、日本文化への同化の差異も窺えるだろう。また、四声点と

の区別、「周囲の環境」に左右されているなど特別な方法で施されていることがわかった。

句読点によつて、江戸時代における和化度の位相、外来文化への工夫を明らかにすることができた。明治期になって欧米の影響をうけて、句読法が行われたという面だけでなく、江戸時代に既に句読法の様々な工夫が行われていたという素地の面も一方にはあったことを考慮すべきではなからうか。

注

- 一 『句読法案』は、文化庁HPの国語施策・日本語教育に掲載されているものである。 <http://www.bunka.go.jp/kokugo/pdf/kujiiri.pdf> 参照。
- 二 岡島冠山(一六七四?一七二八)は長崎の人、姓は岡島、名は明敬・璞、字は玉成・援之。通称は長右衛門または弥太夫、冠山は号である。正徳元年(一七一二)に護國「訳社」の「訳士」となり、訳社において、『唐話類纂』『唐話纂要』『字海便覧』『唐音雅俗語類』『唐訳便覧』『唐話使用』を入門教科書として用いた(石崎又造(一九六七)による)。
- 三 小林芳規(解説)(一九七九) 太宰春台(著)『倭読要領』 勉誠社
- 四 冠山以外の唐話辞書において(●)^(、)も含む。
- 五 「一点方式」というのは、飛田良文(一九八六)の用語。(、)か(、)のどちらか一種の記号を使用し、句点と読点の両方を表記する句読表記法をさす。
- 六 但し、本稿に使っている古典研究会の『唐話辞書類集』第六集に、『唐話

纂要』巻一の一才から三才にかけて四声点にあたるものが見られる。しかし、刊本である『唐話纂要』に筆で加えられた五丁に亘るこれらの四声点は明らかに後の人によって打ったものだと考えられる。故に考察の対象から除くこととする。

#### 参考文献

- 石崎又造(一九六七)『近世日本に於ける支那語文学史』清水弘文堂  
宇野義方(一九八二)『句読法の歴史』森岡健二「ほか」編『講座日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院  
小林芳規(解説)(一九七九)太宰春台(著)『倭読要領』勉誠社  
——(二〇〇七)『句読点(古代)』飛田良文「ほか」編『日本語学研究事典』所収 明治書院  
重松泰雄(一九六三)『美妙齋の句読法—四迷への影響を中心に—』『国文学研究』16号  
杉本つとむ(一九六六a)『句読法の史的考察—江戸時代の文学作品を中心に—』『武蔵野女子大学紀要』Vol.2  
——(一九六六b)『句読点・記号の用法と近代文学』『国文学研究』35  
——(一九七二)『蘭化をめぐる二つの新資料』『武蔵野女子大学紀要』Vol.8  
飛田良文(一九七四)『句読表示の成立過程』『言語生活』No.277  
——(一九八六)『句読法の歴史—明治期を中心に—』『アステ』四  
——(二〇〇二)『西洋表記の日本語表記への影響』飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座6 文字・表記』明治書院  
——(二〇〇七)『句読点(近代)』飛田良文「ほか」編『日本語学研究事典』
- 唐話資料における句読法—冠山の唐話辞書を中心に— 何 曉麗

#### 所収 明治書院

前田富祺(二〇〇七)『唐話辞書』飛田良文「ほか」編『日本語学研究事典』所収 明治書院

#### 使用テキスト・資料

新選名著複製全集近代文学館編集委員会編『新選名著複製全集近代文学館』  
日本近代文学館／市古貞次編『御伽草子』全二十三冊 三弥井書店／谷脇理史編『仮名草子集』早稲田大学蔵資料影印業書／『西鶴選集』影印 桜楓社／神保五彌編『浮世草子集』早稲田大学蔵資料影印業書／洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』中央公論社／蔵中進編『江戸初期無刊記本 遊仙窟 本文と索引』和泉書院／古典研究会編『唐話辞書類集』汲古書院

付記 本稿は平成十九年度の岡山大学言語国語国文学会(於岡山大学)、また、筑紫日本語研究会第二二四回(於九重共同研究所)において発表した内容に加筆・修正したものである。発表の際、有益な御示教をいただいた。心から感謝申し上げます。

(かぎょうれい 岡山大学大学院社会文化科学研究科)